

全国の火山活動状況（1985年7月～12月）

気象庁地震火山部

地震火山業務課火山室

気象庁が常時観測を実施している17火山とその他の火山について、1985年7月以降12月末までの活動状況を、この期間内に得られた情報などを基に要約した。

全国火山活動概況を第1表に、火山情報発表状況を第2表に示す。

第1表 全国火山活動状況(1985)

Table Volcanic Activity in Japan(1985)

Month \ Volcano	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Izu-Oshima								●				
Sakurajima	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
Asosan	●	●	●	●	▲	▲						
Tokachidake					●	●	●	●				
Nasudake									●			●
Kirishimayama								●				
Niijima									●			
Suwnosejima						▲		▲	▲	▲	▲	
Fukutoku-Oka-no-Ba3a	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nishinoshima												●

▲ Eruption ● Anomaly × Observation Impossible.

第2表 火山情報発表状況(1985年7～12月)

火山名 情報	桜 島	阿 蘇 山	浅 間 山	伊 豆 大 島	雌 阿 寒 岳	十 勝 岳	樽 前 山	有 珠 山	北 海 道 駒 ヶ 岳	吾 妻 山	安 達 太 良 山	磐 梯 山	那 須 岳	草 津 白 根 山	三 宅 島	雲 仙 岳	霧 島 山
定 期	6	6	6	6	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
臨 時	13	1		2													
火山活動																	

桜 島 （鹿児島地方気象台）

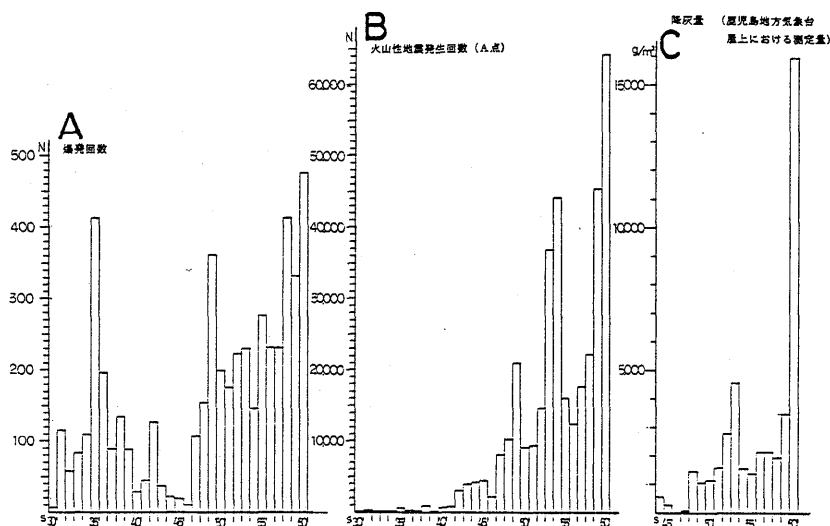
月別の活動の推移を示したのが第3表である。火山活動は引続き活発で、特に12月の爆発回数は75回に達し、1955年10月13日以降鹿児島地方気象台で観測された月別爆発回数としては、3番目の記録となった。

なお、第1図で示すように1985年の火山活動は、爆発回数、火山性地震回数及び降灰量の年合計値において、すべての点で過去の観測値を大きく上回った。また、1982年以降の推移では、第2図で示すように爆発回数及び火山性地震回数において、1985年は全期間をとおして高いレベルで推移しており、第3図で示すように1985年は爆発に伴う諸現象においても顕著であった。

第3表 桜島火山観測資料

月	7	8	9	10	11	12
噴 火 回 数	62(60)	25(20)	63(49)	54(47)	38(34)	78(75)
地 震 回 数	4,922	4,767	5,712	5,775	5,075	8,538
微動継続時間合計(h)	153.0	226.0	251.5	87.3	19.7	30.0

()内：爆発回数，地震回数：B点（地震+微動）



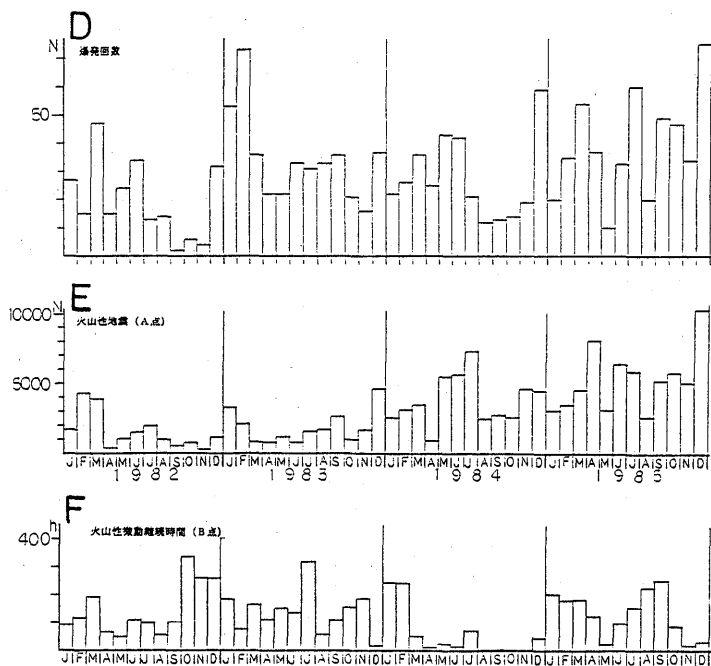
第1図 桜島の火山活動

Fig.1 Volcanic activity at Sakurajima, 1955-1985

A: Yearly number of explosions

B: Yearly number of volcanic earthquakes (point A)

C: Yearly quantity of ash



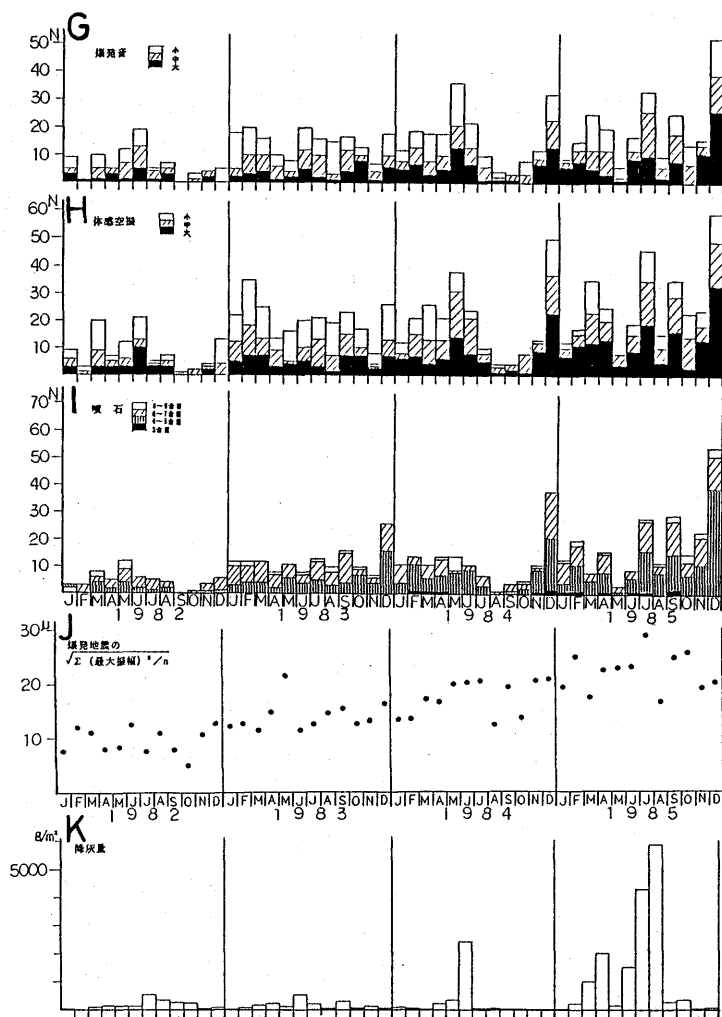
第 2 図 桜島の火山活動

Fig.2 Volcanic activity at sakurajima. 1982 - 1985

D: Monthly number of explosions

E: Monthly number of volcanic earthquakes (point A)

F: Monthly total of duration time of volcanic tremor



第 3 図 桜島の火山活動

Fig.3 Volcanic activity at Sakurajima, 1982 - 1985

G: Monthly frequency of recorded sound of explosions

H: Monthly frequency of felt airshocks

I: Monthly frequency of visual observation of ejected lapilli and/or rocks

J: $((Z(\text{maximum amplitude of explosion earthquake})^2)/N)$

K: Monthly quantity of accumulated at kagoshima Local Meteorological Observatory

以上のような活発な噴火活動に伴い、周辺地域に降灰、空振、噴石等による被害が多発し、市民生活に大きな影響を与えた。

主な爆発とそれに伴う被害状況は次のとおり。

- 7月6日17時20分の爆発は、体感空振が大きく、多量の噴石が4合目まで飛散した。東桜島消防分遣隊の調べでは、この爆発に伴い、火口から約3.0km離れた有村町の木造2階建の物置小屋に噴石が落下、屋根を破り土間に埋没し、直径約2mの穴を生じた。このため、物置小屋は半壊し、飛散した破片により屋内でボヤが発生した。また、噴石が有村町と古里町の海に落下するのを住民が目撃した。
- 7月10日14時14分の爆発は、爆発音・体感空振ともに中で、少量の噴石が7合目まで飛散した。東桜島消防分遣隊の調べでは、この爆発に伴い火口から約2.9km離れた有村町の民家裏の土手に噴石が落下、飛散した噴石により民家の屋根瓦14枚と戸袋の板約1㎡が破損した。また、電線1本を切断した。
- 7月21日05時20分の爆発は、爆発音・体感空振ともに大きく、火山雷や鳴動を伴いながら多量の噴石が4合目まで飛散した。この爆発に伴う連続した噴煙により鹿児島市街地北部に多量の降灰があった。多量の降灰のため、鹿児島市清水町の遮断機が誤作動して踏切内で事故が発生した。また、爆発に伴った空振により鹿児島市高麗町の高校の窓ガラス5枚と、上福元町の食堂の窓ガラス1枚が破損した。
- 7月28日18時45分の爆発は、体感空振が大きく、鳴動を伴い、多量の噴煙が1,000m以上（雲に入る）に達した。爆発後も噴煙を連続的に噴出し、鹿児島市街地に多量の降灰があった。（鹿児島上空1,500m付近で28日15時東の風14m/s、21時東南東の風13m/s）。29日09時の気象台における日降灰量は2,476g/㎡に達し、昭和44年4月からの降灰量観測以来の最高となった。

21日からの連日の降灰により、鹿児島市内の交通機関に障害が発生した。鹿児島鉄道管理局の調べによると、27日、28日、29日に西鹿児島駅構内でポイントの転換不良が発生し、列車の運行に遅れが出た。また、国鉄と市電の踏切で誤作動がたびたび発生した。

7月31日は、07時00分、08時48分、09時51分に爆発があり、噴煙は4,000m以上の高さ上昇し、熊本県南西部、長崎県、最も遠い所では壱岐で降灰が認められた。（鹿児島上空4,400m付近で31日09時南々東の風7m/s）。

- 8月4日10時42分の爆発では、鹿児島市南部に多量の降灰があり、国鉄鹿児島本線の鹿児島～伊集院駅間と、指宿枕崎線の西鹿児島～南鹿児島駅間で徐行運転を行い、10の列車に遅れが出た。5日09時の気象台における日降灰量は2,195g/㎡に達し、7月29日に次いで降灰量観測以来第2位の量となった。
- 8月11日19時19分の爆発では、桜島町武地区に小指大の火山礫が降り、車1台のフロントガラス及び太陽熱温水器2台が破損した。また、雨混じりの降灰により配電線の碍子が絶縁不良となったため、島内の鹿児島市吉野町、鹿児島郡吉田町などで約6,500戸が停電した。また、鹿児島市北部の国鉄日豊本線鹿児島～重富駅間の架線碍子がスパークしたため、電流を止めて洗浄を行い、列車7本に遅れが出た。
- 8月14日08時16分の噴火では、島内の桜島町西白浜地区に小指大の火山礫が降り、車2台のフロントガラス、太陽熱温水器3台が破損した。

- 8月14日20時07分の爆発では、鹿児島市北部の日豊本線重富～竜ヶ水駅間で降灰による架線の絶縁不良のため、列車5本が遅れ4本が運休した。島内の吉野町では、降灰による送電線の絶縁不良のため2,560戸が停電した。
- 8月16日11時42分の爆発では、島内の桜島町白浜・二俣地区に最大3cm程度の火山礫が降り、車7台のフロントガラスなど、太陽熱温水器12台が破損し、多数のビニールハウスに被害があった。また、始良郡南部の日豊本線加治木～帖佐駅間で降灰のため踏切の警報が作動せず、徐行運転を行い列車5本が遅れが、帖佐駅でポイントが転換不能となり列車1本に遅れが出た。

以上の被害状況は桜島町役場、鹿児島鉄道管理局、九州電力の調べによるものである。

県警察本部の調べでは、7月21日から連日降灰のあった鹿児島市及び近郊で、降灰が原因の交通事故が7月に7件、8月に5件、合計12件発生し、このうち8件は積灰によるスリップ事故であった。

また、市交通局の調べでは、降灰による踏切の遮断機の誤作動が、7月に2日間、8月に8日間発生した。

- 9月4日に4回、5日に2回爆発があり、噴煙は3,000mの高さに上昇し、5日から6日午前にかけて長崎、佐賀、福岡及び下関市で降灰が認められた。
- 9月12日15時33分の爆発は、爆発音・体感空振ともに大きく、少量の噴石が5合目まで飛散し、やや多量の噴煙は2,700mの高さに達し南東に流れた。県警察本部の調べでは、この爆発で島内の桜島口に最大1cm程度の火山礫が降り、走行中の車1台のフロントガラスが破損した。
- 9月22日01時56分の爆発は、体感空振が大きく、火山雷を伴い中量の噴石を6合目まで飛散した。この爆発により大分県東部の大分、佐伯、津久見及び臼杵の各市で降灰が認められた。
- 10月14日06時43分の爆発は、体感空振が大きく、火山雷や鳴動を伴い多量の噴煙が3,000mの高さに達し南東に流れた。垂水市役所の調べでは、この爆発により南岳から東へ約12km離れた垂水市牛根麓から二川にかけて最大2.5cmの軽石状混じりの火山礫が降った。（鹿児島市上空1,500m付近で14日09時北々西の風8m/s、3,000m付近で西北西の風13m/s）。
- 11月25日14時27分の爆発は、爆発音中・体感空振大で、鳴動を伴い多量の噴石が4合目まで飛散した。このため、桜島南側斜面の4合目付近で山火事が発生し、5分間続いた。
- 12月3日01時03分の爆発は、爆発音・体感空振ともに大きく、火柱や鳴動を伴い多量の噴石が4合目まで飛散した。大きな空振により鹿児島市街地で広範囲にわたって、家屋の窓ガラスなどが破損する被害が発生した。鹿児島市消防局、県消防防災課の調べでは、鹿児島市街地22箇所、桜島3箇所、玄関のガラス7枚、食堂入口のガラス1枚、窓ガラス180枚、計188枚が破損し、その他、鹿児島市役所では玄関内側のかんぬき2本が折損した。
- 12月5日12時39分と16日08時52分の爆発による被害は、東桜島消防分遣隊の調べによると、いずれも山麓に火山礫が降り、5日は島内の黒神町塩屋ヶ元の県道で、16日は島内の桜島口から有村展望所間で、それぞれ走行中の車1台のフロントガラスが破損した。
- 12月19日05時46分の爆発は、体感空振が大きく、火柱や火山雷を伴い中量の噴石が6合目まで飛散した。空振は日南市、宮崎市、延岡市でも感じられた。垂水市役所の調べでは、空振により南岳から東へ11～14km離れた垂水市の辺田から牛根境にかけた地域の民家57戸の窓ガラス85枚、車庫内の車のフロントガラス1枚が破損、また、島内の黒神町に火山礫が降り、走行中の車1台

のフロントガラスが破損した。

- 12月19日18時01分の爆発は、体感空振が大きく、多量の噴石が4合目まで飛散した。空振は都城市、日南市で感じられた。東桜島消防分遣隊の調べでは、この爆発により南岳から南東へ約3.0 km離れた有村町の宅地内の畑に噴石が落下し、直径約1 mの穴を生じた。

阿 蘇 山 （阿蘇山測候所）

月別の火山性地震回数等の推移を示したのが第4表である。火山性地震は8～9月にかけ増加し、9月10日00時29分外輪山北部を震源とする地震は、測候所で震度Ⅱを観測した。また、8月30日17時01分と11月29日16時40分火口縁で一部の人が感じる地震があった。弧立型微動回数は6月中旬以降次第に減少したが、8月下旬～9月中旬にかけ一時増加した。連続微動月平均振幅には変化は認められなかった。

第4表 阿蘇火山観測資料（A点）

月	7	8	9	10	11	12
地 震 回 数	12	111	113	17	17	11
弧立型微動回数 0.5 μ 以上	208	989	1,846	145	218	397
連続微動平均振幅 (μ)	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2

中岳第1火口の活動は、第4図及び第5図で示すように、1984年ころから次第に活発化し、新噴気孔の生成、湯だまりの消滅、5～6月の噴火活動と推移したが、7月1日に火口底内に湯だまりが形成され、火山灰等の噴出活動は停止した。7月ほぼ全面湯だまりとなった火口底は、その後次第に湯量が減少し8～9月には火口底の約半分程度となり、12月には火口底の南側から東側にかけ干潟の部分が増加した。

湯だまり内の活動は、全期間を通して小規模な土砂噴・噴湯現象（高さ1～4 m）が、9月中旬に一時鳴動が観測された。また、湯だまり周辺及び火口壁の噴気量の増加が目立ってきた。

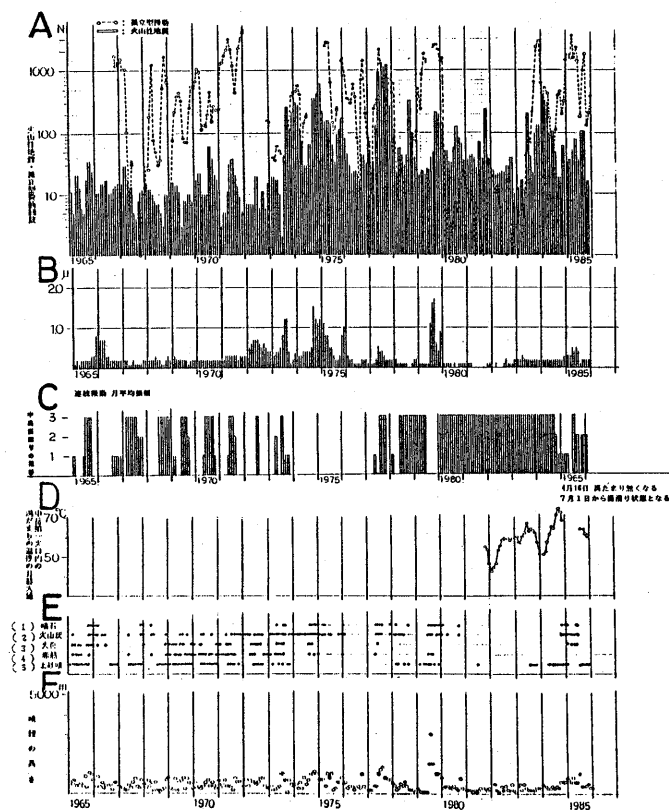
赤外線放射温度計による湯だまり表面温度の観測結果は次のとおり。（月の最高値℃）

月	1985/7	8	9	10	11	12
温 度	61	—	64	61	60	60

浅 間 山 （軽井沢測候所）

月別の活動の推移を示したのが第5表及び第6図である。1983年4月8日の爆発後、火山性地震・火山性微動回数は大きく減少し、その傾向は現在も続いている。また、遠望観測の結果、7月以降全期間を通して噴煙の色は白色、噴煙量は2～3（少～中量）、噴煙の最高高度は8月24日に1,000 mが観測された。

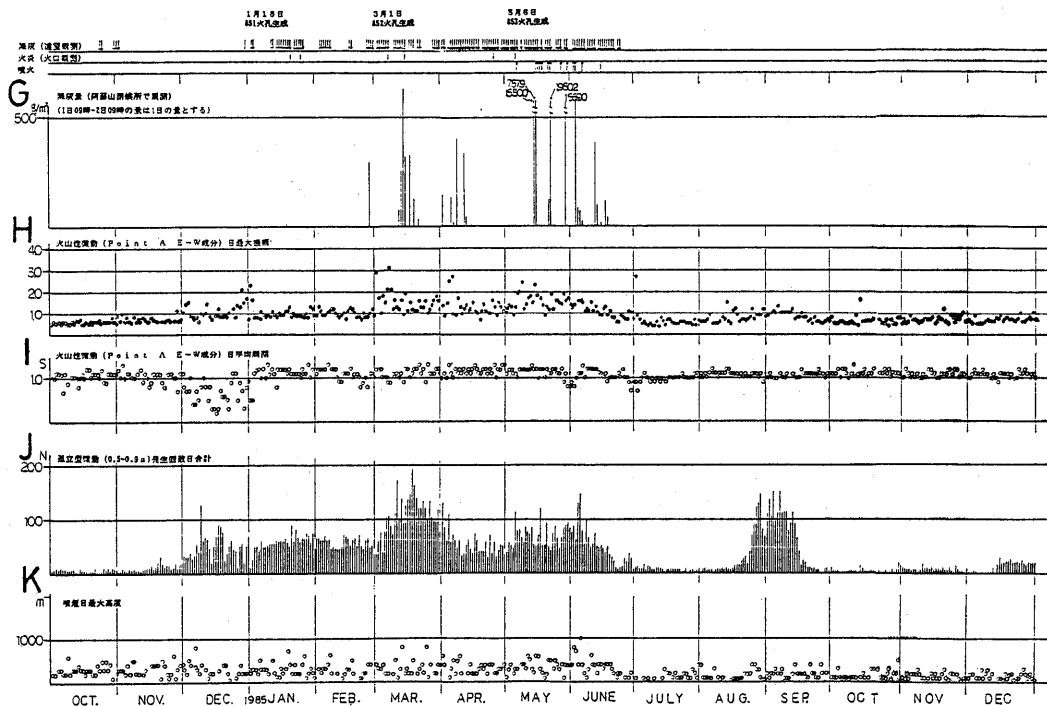
10月2日の火口観測は、火口内の噴煙量が多く、火口内の状況を十分観測することができなかった。



第 4 図 阿蘇山の火山活動

Fig.4 Volcanic activity at Aso san, 1965-1985

- A: Monthly number of isolated tremor (broken line) and volcanic earthquakes (bar graph)
- B: Monthly averaged amplitude of continuous tremors (E-W component, Point A)
- C: Grade of quantity of water pooled within the first crater of Nakadake
- D: Monthly maximum surface temperature of water pool within the first crater of Nakadake
- E: Phenomena observed at the surface of the first crater of Nakadake
 (1): ejection of incandescent or older rocks, (2): ash emission, (3): volcanic frames, (4): red-hot lava or at least incandescent material at the bottom of the crater, (5): ejection of older rocks with muddy water
- F: Monthly maximum height of plumes



第 5 図 阿蘇山の火山活動

Fig.5 Volcanic activity at Asosan, 1984.10 - 1985.12

G : quantity of ash

H : Daily maximum amplitude of continuous tremors

I : Daily mean dominant period of continuous tremors

J : Daily number of recorded isolated tremors

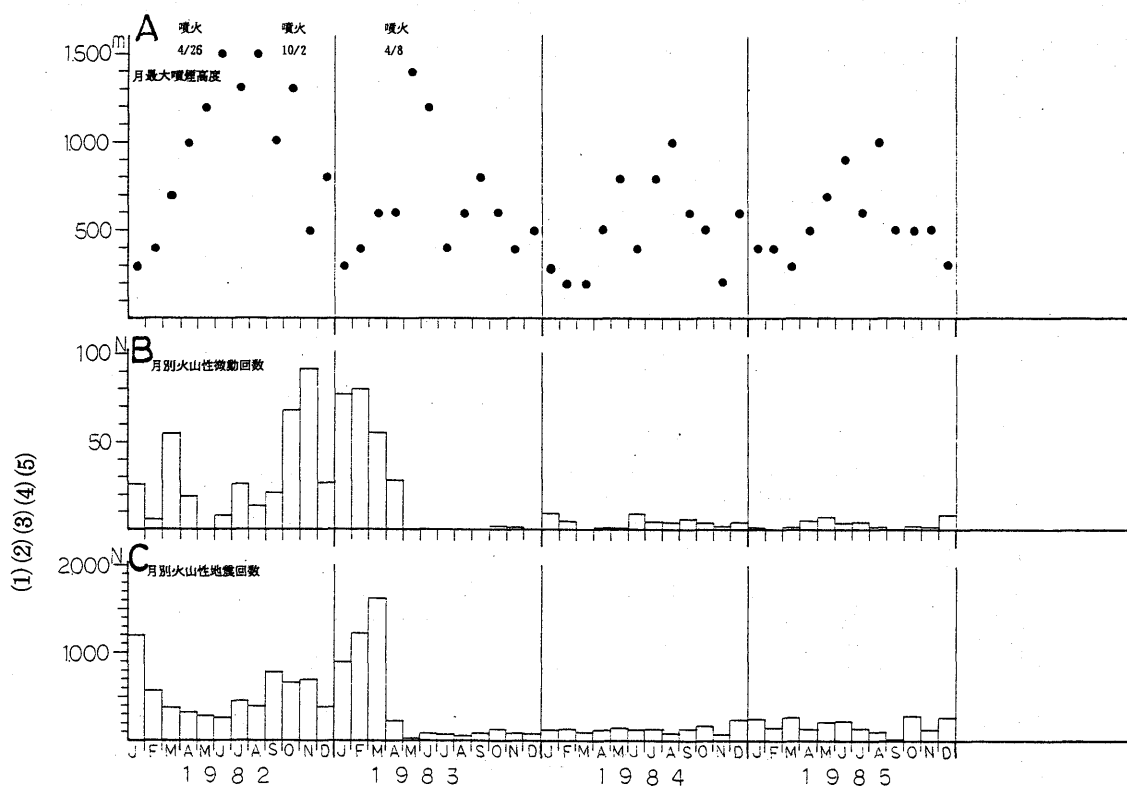
K : Daily maximum height of plumes

第 5 表 浅間山火山観測資料

月	7	8	9	10	11	12
火山性地震回数 (A 点)	5	3	6	20	5	15
火山性微動回数 (A 点)	1	1	0	1	0	3

また、火口縁から噴気音は聞かれなかった。

陸上自衛隊機撮影の火口写真 (11 月 22 日 09 時 30 分) によると、火口内の噴気は弱く、火口底は東半分がロート状に一段と深くなっていたが、溶岩等による赤熱物質は認められなかった。



第 6 図 浅間山の火山活動

Fig.6 Volcanic activity at Asamayama, 1982 - 1985

A: Monthly maximum height of plumes

B: Monthly number of volcanic tremors

C: Monthly number of volcanic earthquakes

伊豆大島（大島測候所）

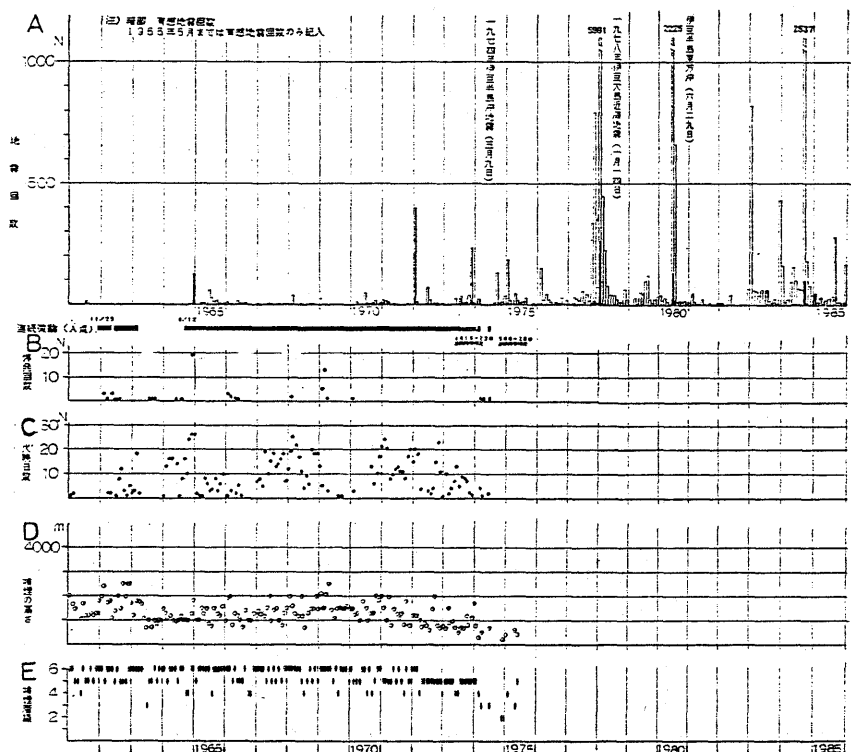
月別の火山性地震等の推移を示したのが第6表である。8月と12月に火山性地震が群発し、特に8月17～19日の間に発生した地震の震源は島内若しくはその周辺域であった。

第 6 表 伊豆大島火山観測資料

月	7	8	9	10	11	12
火山性地震回数 (C点)	35 (2)	288 (2)	13	13 (2)	9	169 (1)
火山性微動回数 (A点)	—	—	—	—	—	—

() 内有感地震回数

1961年以降の活動の推移を示したのが第7図である。1975年6月以降遠望観測では、噴煙等の表面現象はまったく観測されなくなり、現在もその状態が続いている。しかし、火孔内及び内輪山内には各所に噴気地帯があり、また、火孔南西部の火口壁の崩壊が目立っている。



第7図 伊豆大島の火山活動

Fig.7 Volcanic activity at Izu-Oshima, 1961-1985

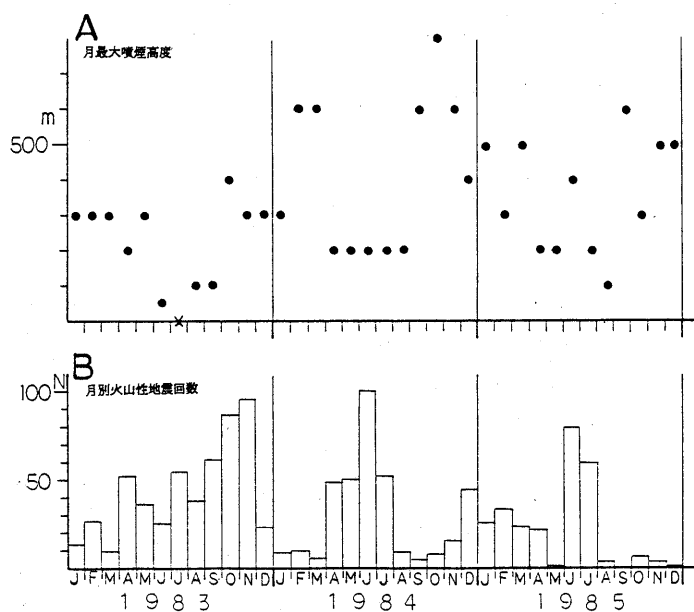
- A: Monthly number of volcanic earthquakes
- B: Monthly number of explosions
- C: Monthly number of glow
- D: Monthly maximum height of plumes
- E: Monthly maximum JMA Scale of quantity of plume

雌阿寒岳（釧路地方気象台 8月1日，10月1日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回数	60	3	0	6	3	1

また、1983年以降の月別火山性地震回数・遠望観測による月最大噴煙高度の推移を示したのが第8図である。火山性地震回数が時々多発しており、噴煙高度は若干高まる傾向が見られる。



第 8 図 雌阿寒岳の火山活動

Fig.8 Volcanic activity at Meakandake, 1983 - 1985

A : Monthly maximum height of plumes

B : Monthly number of volcanic earthquakes

現地観測を7月30～31日、9月27～28日に実施した。結果は次のとおり。

(1) ポンマチネシリ（本峰）

第4火口の噴気活動は依然活発で、火口壁及び火口縁に硫黄の付着が認められた。その他の火口には、特に大きな変化は認められない。

(2) 中マチネシリ火口群

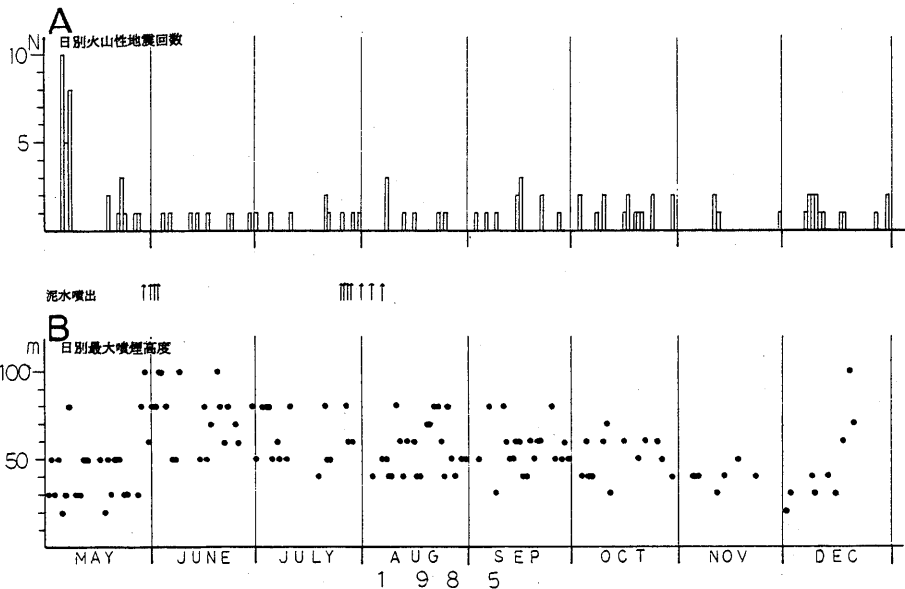
各噴気孔とも活発な活動を続けている模様だが、火口内全体が噴煙に覆われ詳細は不明。

十 勝 岳（旭川地方气象台 8月9日、9月28日火山情報）

火山性地震等の月別回数は次のとおり。

月	7	8	9	10	11	12
火山性地震回数	9	7	11	15	4	14
火山性微動回数	0	0	1	0	0	0

また、5月以降の日別火山性地震回数及び遠望観測による日最大噴煙高度の推移を示したのが第9図である。5月上旬に火山性地震が一時多発したが、その後は少ない状態が続いている。噴煙高度は5月下旬ころから次第に高まり、9月ころまで高い状態が続いたが、10月ころから次第に低下の傾向を示した。しかし、12月に入り再び高まる傾向にある。



第9図 十勝岳の火山活動

Fig.9 Volcanic activity at Tokachidake, May—Dec. 1985

A: Daily number of volcanic earthquakes

B: Daily maximum height of plumes

1959年以降の活動の推移を示したのが第10図である。1975年以降62-I火口の噴煙高度の低い状態が続いたが、1981年ころから次第に高まり、特に1983年末から現在まで高い状態が続いている。現地観測による62-I火口の地中温度も1975年以降、やゝ上昇の傾向がみられる。

現地観測を8月7～8日、9月26～27日に実施した。結果は次のとおり。

(1) 62-I火口

5月に生成された噴気孔の左下に長径15 m位の新たな噴気孔が生成され、活発な噴気活動を続けており、8月の観測では極く弱い噴砂現象が見られた。

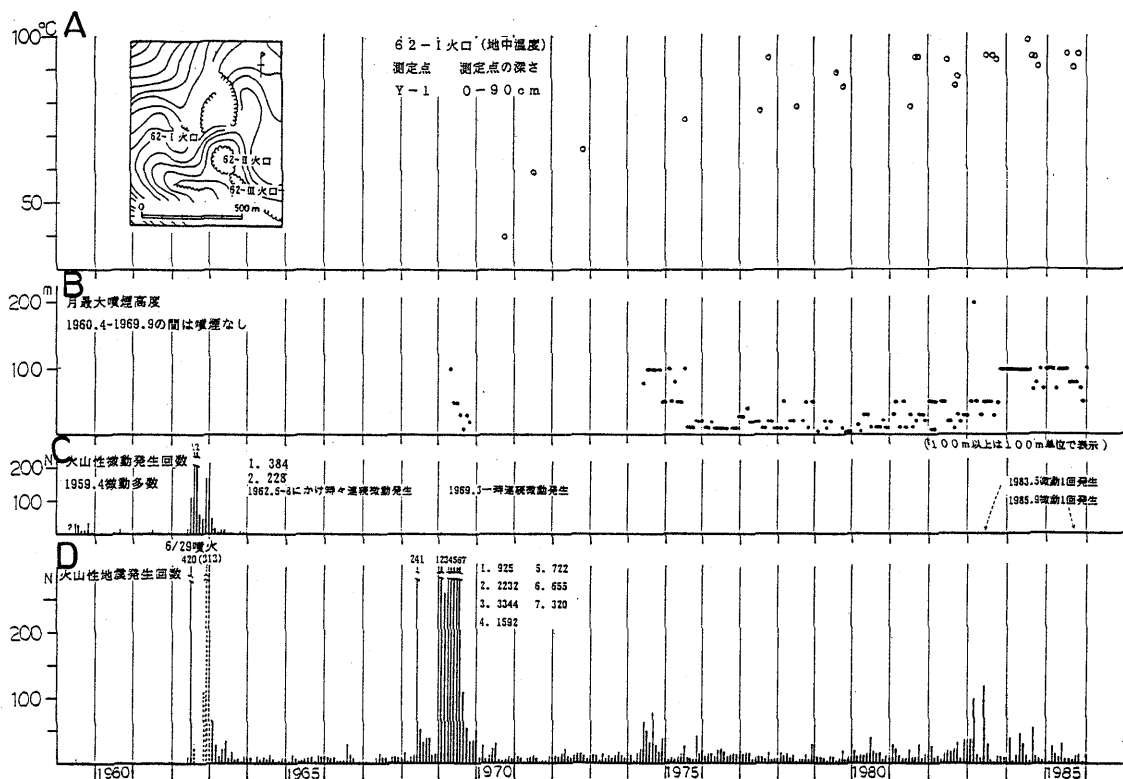
(2) 62-II火口

引き続き活発な噴気活動を続けている。

(3) 安政火口

大小多数の噴気孔が活発な噴気活動を続けている。

(4) その他の大正火口、振子沢、湯の沢では、弱い噴気活動を続けている。



第 10 図 十勝岳の火山活動

Fig.10 Volcanic activity at Tokachidake, 1959-1985

A: Underground temperature

B: Monthly maximum height of plumes

C: Monthly number of volcanic tremores

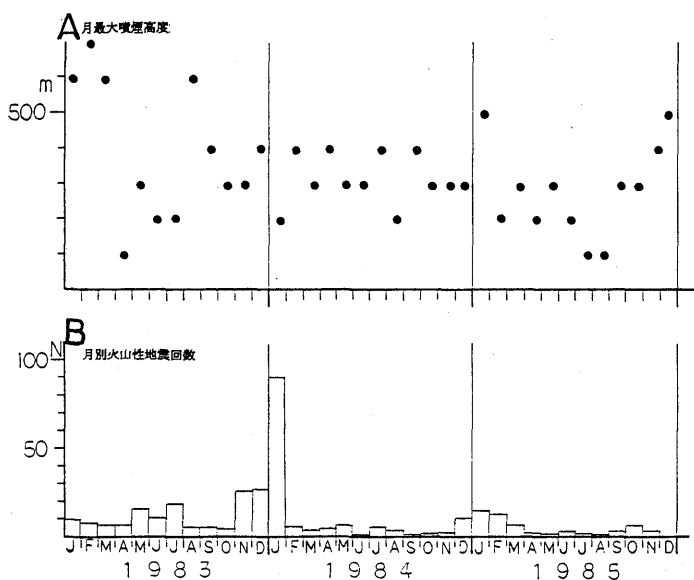
D: Monthly number of volcanic earthquakes

樽 前 山 (苫小牧測候所 8月10日, 10月7日火山情報)

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	2	1	4	7	4	0

また, 1983年以降の月別火山性地震回数及び遠望観測による月最大噴煙高度の推移を示したのが第11図である。1984年1月に火山性地震が群発したが, その後は減少した。



第 11 図 樽前山の火山活動

Fig.11 Volcanic activity at Tarumaesan, 1983—1985

A : Monthly maximum height of plumes

B : Monthly number of volcanic earthquakes

現地観測を 8 月 6～7 日, 10 月 3～4 日に実施した。結果は次のとおり。

前回 (5 月) の現地観測の結果と比較して, 特に変化は認められなかった。

有 珠 山 (室蘭地方気象台 7 月 25 日, 10 月 14 日火山情報)

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	10	22	11	6	7	3

また, 1983 年以降の月別火山性地震回数及び遠望観測による有珠山の月最大噴煙高度の推移を示したのが第 12 図である。遠望観測可能な日が少ないが, 噴煙高度・火山性地震回数に, 特に変化は認められない。

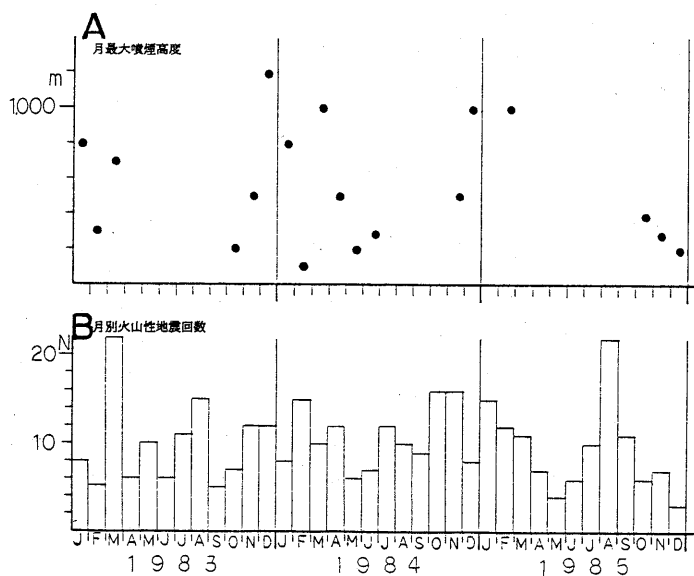
現地観測を 7 月 19～20 日, 10 月 8～9 日に実施した。結果は次のとおり。

(1) 有 珠 山

銀沼火口, I 火口及び小有珠東斜面等では, 活発な噴気活動が続いており, 一部で噴気温度が 500℃を越える場所がある。その他の外輪山や北屏風山の地熱地帯には変化はない。

(2) 昭和新山・四十三山

前回 (5 月) の現地観測の結果と比較して, 特に変化は認められなかった。



第 12 図 有珠山の火山活動

Fig.12 Volcanic activity at Usuzan, 1983—1985

A: Monthly maximum height of plumes

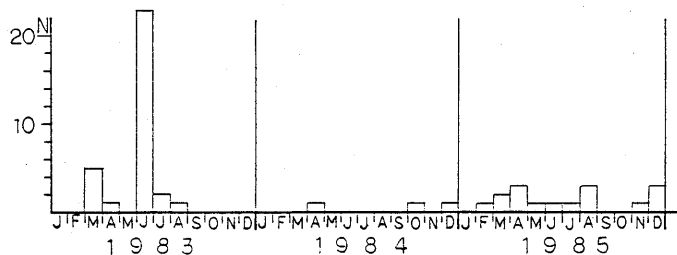
B: Monthly number of volcanic earthquakes

北海道駒ヶ岳（森測候所 8月2日、10月7日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	1	3	0	0	1	3

また、1983年以降の月別火山性地震回数の推移を示したのが第13図である。1983年6月に火山性地震がやゝ多発したが、その後は減少した。



第 13 図 北海道駒ヶ岳における月別火山性地震回数

Fig.13 Monthly number of volcanic earthquakes at Hokkaido-komagataka, 1983-1985

現地観測を7月30～31日、10月3～4日に実施した。結果は次のとおり。

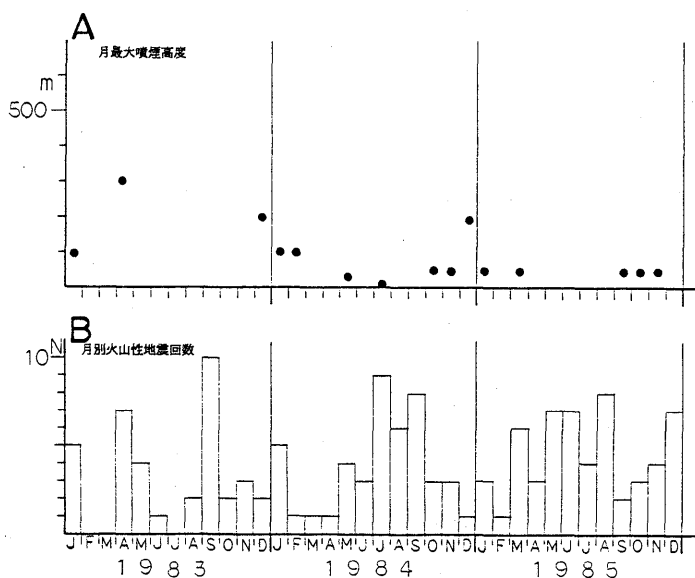
前回（5月）の現地観測と比較して、7月の現地観測で明治火口東方の噴気地帯の噴気量がやゝ増加したが、その他の火口に、特に変化は認められなかった。

吾妻山（福島地方気象台 8月6日、11月7日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回数	4	8	2	3	4	7

また、1983年以降の月別火山性地震回数及び遠望観測による月最大噴煙高度の推移を示したのが第14図である。遠望観測可能な日が少ないが、噴煙高度・火山地震回数に特に変化は認められない。



第14図 吾妻山の火山活動

Fig.14 Volcanic activity at Azumayama, 1983-1985

A: Monthly maximum height of plumes

B: Monthly number of volcanic earthquakes

現地観測を8月1～2日、10月31日、11月1日に実施した。結果は次のとおり。

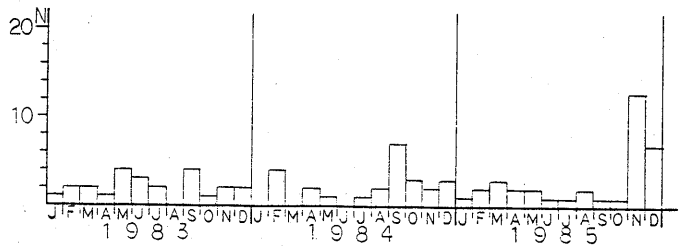
一切経山南東斜面の八幡焼や硫黄平橋付近では、火山ガス（ H_2S ）の濃度が高い状態が続いているが、その他の観測点に、特に変化は認められなかった。

安達太良山 （福島地方気象台 8月6日，11月7日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

年	1985/7	8	9	10	11	12
回数	1	2	1	1	13	7

また，1983年以降の月別火山性地震回数の推移を示したのが第15図である。1985年11～12月に火山性地震がやゝ多発している。



第15図 安達太良山における月別火山性地震回数

Fig.15 Monthly number of volcanic earthquakes at Adatarayama, 1983—1985

現地観測を8月7～9日，10月28～30日に実施した。結果は次のとおり。

沼ノ平西側登山道付近の噴気地帯及び他の観測点に，特に変化は認められなかった。

磐梯山 （若松測候所 8月3日，10月11日火山情報）

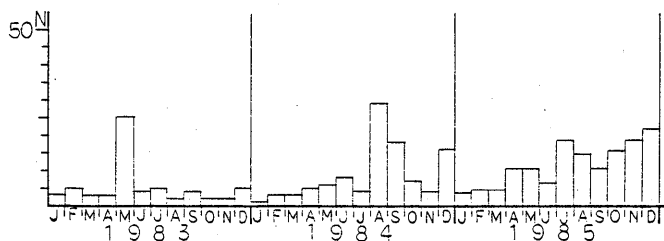
火山性地震の月別回数は次のとおり。

年	1985/7	8	9	10	11	12
回数	19	15	11	16	19	22

また，1983年以降の月別火山性地震回数の推移を示したのが第16図である。1983年以降全般的に，火山性地震回数がやゝ増加している。

現地観測を7月31日～8月1日，10月3日～4日に実施した。結果は次のとおり。

各観測点とも特に変化は認められなかった。

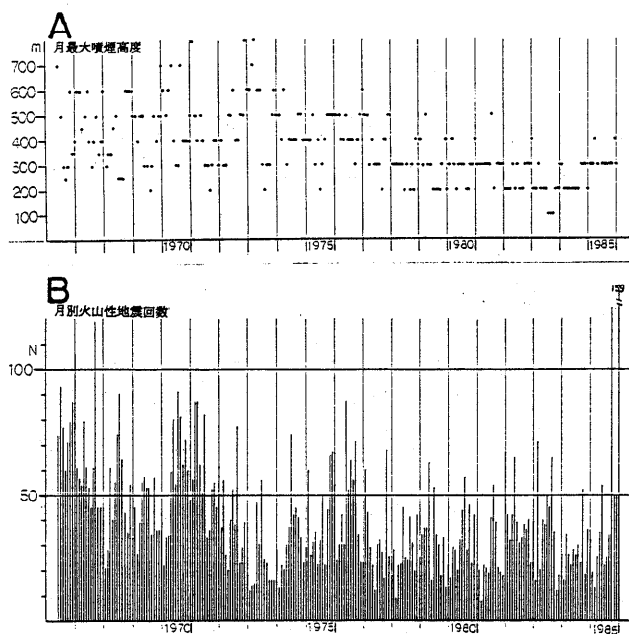


第 16 図 磐梯山における月別火山性地震回数

Fig.16 Monthly number of volcanic earthquakes at Bandaisan, 1983—1985

那 須 岳 （宇都宮地方気象台 8月7日，10月9日火山情報）
火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	25	34	124	50	50	159



第 17 図 那須岳の火山活動

Fig.17 Volcanic activity at Nashudake, 1966—1985

A: Monthly maximum height of plumes

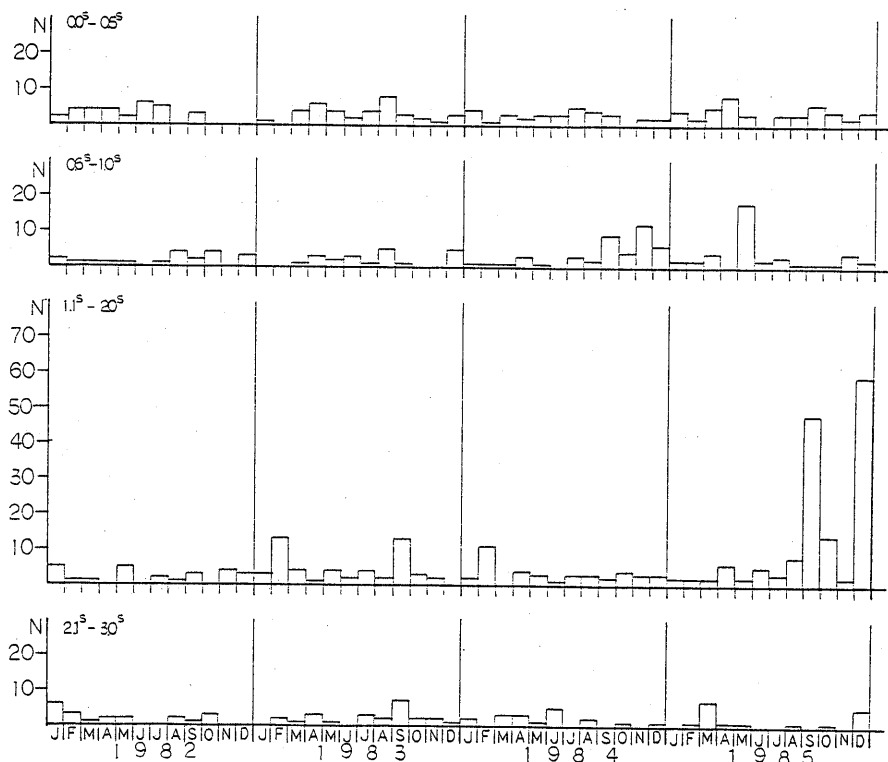
B: Monthly number of volcanic earthquakes

また、1966年以降の月別火山性地震回数及び遠望観測による月最大噴煙高度の推移を示したのが第17図である。9月と12月に那須岳北方の福島県中部で火山性地震が群発し、月回数は那須岳の震動観測以来1位及び2位を記録した。1982年以降のS-P区分別月別火山性地震回数の推移を示したのが第18図である。S-P 1.1～2.0秒の範囲に集中している。

月最大噴煙高度は、1973年ころから次第に低くなる傾向にある。

現地観測を7月29日～30日、10月3日～4日に実施した。結果は次のとおり。

各観測点とも特に変化は認められなかった。



第18図 那須岳におけるS-P区分別火山性地震回数

Fig.18 Monthly number of volcanic earthquakes for each S-P time

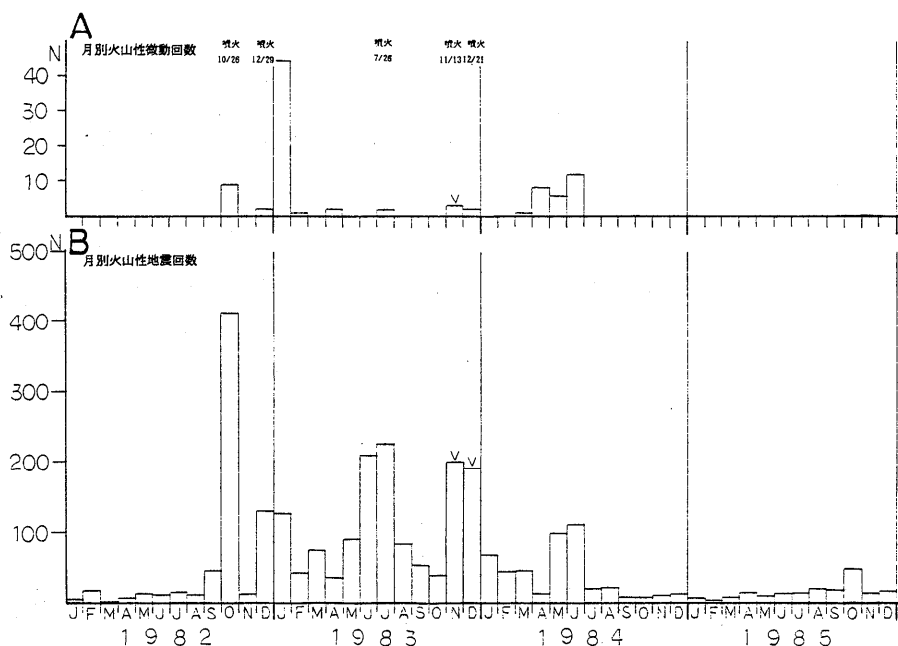
- (a) 0.0—0.5 sec
- (b) 0.6—1.0 sec
- (c) 1.1—2.0 sec
- (d) 2.1—3.0 sec

草津白根山（前橋地方気象台 8月17日、10月23日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

年	1985/7	8	9	10	11	12
回数	14	21	18	48	13	17

また、1982年以降の月別火山性地震回数等の推移を示したのが第19図である。1982年から1983年にかけて活発な噴火活動があり、それに伴い火山性地震・火山性微動が多発したが、1984年7月以降は火山性地震は減少し、火山性微動は発生していない。



第19図 草津白根山の火山活動

Fig.19 Volcanic activity at Kusatsu-Shiranesan, 1982-1985

A: Monthly number of volcanic tremors

B: Monthly number of volcanic earthquakes

現地観測を8月12～13日、10月11～15日に実施した。結果は次のとおり。

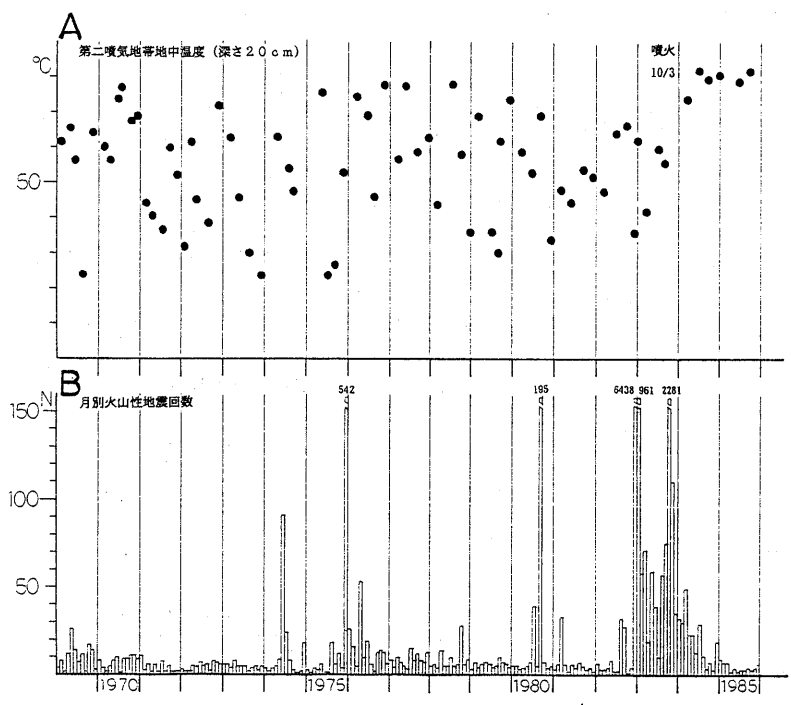
各観測点とも特に変化は認められなかった。

三宅島（三宅島測候所 9月6日、12月9日火山情報）

火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回数	3	3	28	3	4	6

また、1969年以降の月別火山性地震回数及び雄山第二噴気地帯地中温度の推移を示したのが第20図である。1983年10月3日の噴火後火山性地震回数は減少したが、第二噴気地帯の噴気温度は噴火後上昇し、現在も高温の状態が続いている。第一噴気地帯にも同様な傾向がみられ、また、1984年3月に第一噴気地帯付近で新たな噴気地域が確認されている。



第 20 図 三宅島の火山活動
 Fig.20 Volcanic activity at Miyakejima, 1969－1985
 A: Underground temprature at No.2 fumarolic area
 B: Monthly number of volcanic earthquakes

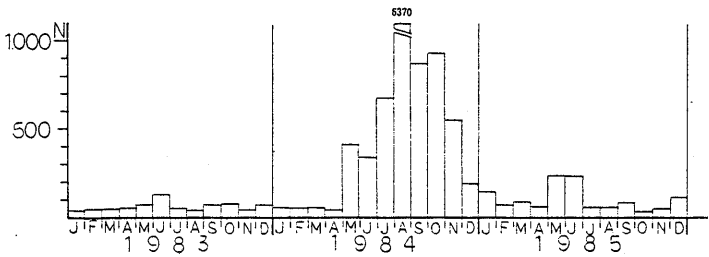
現地観測を9月5日、12月5～6日に実施した。結果は次のとおり。

- (1) 雄山山頂部の第一・第二及び新たな噴気地帯に、特に変化は認められなかった。
- (2) 引続き新鼻付近の碎屑丘の一部に、地中温度の高温部が認められる。

雲 仙 岳 （雲仙岳測候所 8月10日、12月10日火山情報）
 火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	58	59	78	34	44	110

また、1983年以降の月別火山性地震回数の推移を示したのが第21図である。1984年5月～11月
にかけ火山性地震の顕著な群発があったが、その後目立った群発は認められない。



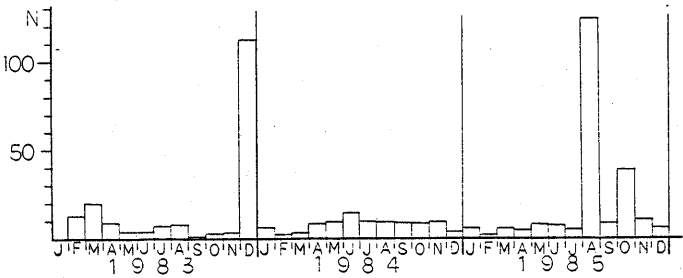
第 21 図 雲仙岳における火山性地震回数
Fig.21 Monthly number of volcanic earthquakes at Unzendake,
1983－1985

現地観測を6月6日、8月9日、12月6日に実施した。結果は次のとおり。
各観測点とも特に変化は認められなかった。

霧 島 山 （鹿児島地方気象台 9月13日火山情報）
火山性地震の月別回数は次のとおり。

月	1985/7	8	9	10	11	12
回 数	5	125	9	39	11	6

また、1983年以降の月別火山性地震回数の推移を示したのが第22図である。1983年12月と1985
年8月に火山性地震が群発している。



第 22 図 霧島山における火山性地震回数
Fig.22 Monthly number of volcanic earthquakes at Kirishimayama,
1983－1985

8月から9月の火山性地震のうち、8月16日21時56分の地震の震源は、手洗温泉の北西約4km付近で、霧島地方西部で震度Ⅱ程度であった。また、9月1日20時16分の地震の震源は、湯之野温泉の南約1.5km付近で、霧島地方南西部で震度Ⅱ程度であった。

現地観測を8月21日、9月4～5日に実施した。結果は次のとおり。

- (1) 新燃岳山頂火口内の第6火孔の噴気温度は156℃で、前回(4月)より21℃下降したが、噴出力や噴気音には変化は認められなかった。
- (2) 前回(4月)新燃岳北側火口縁の噴気地帯に外側斜面への拡大が認められたが、今回の観測では拡大傾向は認められず、噴気活動も弱まっていた。

新 島

9月21～22日にかけて新島近海で地震が群発し、新島では20数回の有感地震を感じた。

福德岡の場

変色水視認(8月13日、9月17日、10月17日、11月14日、12月23日)

西 之 島

変色水視認(12月2日)

変色水が認められたのは、昭和57年4月以来のことである。